

洪水と復興の歴史を語る石積み

川越のまちを歩くと、古い石積みを見かけることがあります。地味な存在であるため見過されがちですが、見事な仕上がりのものが数多くあります。元町2丁目、高沢橋のたもとにある六塚稲荷神社は、そのような石積みが残る場所の一つです。神社の周囲を守るように築かれた石積み正面は、本殿の基礎部分と同様の精巧な加工が施されています。また、側面は亀甲状の石材を巧みに組み合わせ、堅固な形になっています。

神社の裏の石積みには、旧赤間川あかまがわの洪水を物語る碑文が残されています。これによると、幕末期に洪水で石積みが崩れて復興されたことがわかります。また、明治43年と大正2年8月にも洪水が発生し、大きな被害があったようです。現在の石



積みは、大正2(3)年に復興されたものです。手間暇をかけた当時の職人技が光る、これらの石積み。幾度となく起きた洪水の記録であるだけでなく、復興に尽力したまちの皆さんの、神社を大切にしてきた歴史でもあります。



コチョウラン

お祝いの贈花として人気のコチョウラン。野生の物

は、直射日光が遮られる森の中で木の枝などに巻き付いていて、花は地面に向かって下向きに咲いています。湿度の高い場所を好み、雨や霧を吸収して成長します。

子どもの頃から植物が好きで、高校生の時からコチョウランの栽培に興味を持ち始めた森田康雄さん(61歳・南田島)。コチョウランを中心に1年間で約10万鉢のランを栽培しています。台湾南部など熱帯生まれの野生の物を品種改良して作った苗を、組織培養で増やして栽培するのが一般

的。川越産は都内からの需要が多いため、森田さんはより高品質の新品種開発もしています。

普段よく見る、莖が曲線状のコチョウランは、栽培者の技術で作られた物。「湿度、光、肥料、温度、水などを同時に調整するのが難しいです。のめり込むタイプではなく、バランスよく見られる人が栽培に向きます」と森田さん。花もちちは良く、きちんと管理すると2か月ほど楽しめるそうです。



川越市内に数多くある桜の名所。その中でも北公民館前の新河岸川兩岸の桜並木は、毎年多くの花見客でにぎわっています。この場所

で4月7日・8日に、夜桜の下を和舟でくぐる「小江戸川越夜桜舟遊」が行われました。舟の上から見る桜と光と夜の闇が織りなす幻想的な風景を、2日間で1028人が楽しめました。おぼろ月に照らされた夜桜もいいですが、光に照らされ川面に映える夜桜も、風情あるものですね。



編集後記

ぶんべり